

「鹿児島県の近現代」教育研究センター

近現代センター通信

第5号 2025年3月

—目次—

危機の時代における海外へのまなざし (松田忠大)	1	口之津・大牟田・荒尾・盤山：鹿児島県の 「移住」をめぐる問題提起 (日高優介)	11
#昭和99①木脇藤次郎が見た昭和 (丹羽謙治)	3	世界に誇る鹿児島の食文化～桜島大根～ (加治屋勝子)	13
②知覧の戦中・戦後 (伴野文亮)	4	明治40年の『鹿児島県写真帖』(小林善仁)	15
③昭和の鹿児島：経済成長への『開発』と 人々の生活 (日高優介)	5	資料『大牟田・荒尾地区与論会だより』 について (藤村一郎)	17
④終戦直後の鹿児島と奄美出身者 (中嶋晋平)	6	川路家本家・川路利行について (下豊留佳奈)	18
⑤地域シンポジウム 沖永良部の昭和 (澤田成章)	7	実業補習学校を知っていますか(竹村茂紀)	19
⑥鹿児島が生んだミステリ評論家中島河太郎 (鈴木優作)	9	鹿児島城下の西郷家屋敷について (友野春久)	21
カタール大学・フィレンツェ大学・ポロー ニャ大学講演レポート (鈴木優作)	10	吉田初三郎が描く大口町鳥瞰図 (吉満庄司)	23
		寄贈資料・今後の予定	29

秋のシンポジウム

「〈危機〉の時代における海外へのまなざし—明治と現代、そして 鹿児島—」の開催

「鹿児島県の近現代」教育研究センター 副センター長 松田 忠大

「鹿児島県の近現代」教育研究センターは、2025年11月4日に鹿児島大学稲盛会館において、「〈危機〉の時代における海外へのまなざし—明治と現代、そして鹿児島—」をテーマとした秋のシンポジウムを開催した。本シンポジウムは、明治初期にわが国が行った西洋の制度の導入、外国人材の活用法を明らかにしながら、〈危機〉の時代を克服した先人たちの行動を踏まえ、今後の日本および鹿児島が構築すべき外国との関係、とるべき経済や地域の活性化策についての提言を導くことを目的としたものである。

この目的にしたがい、「お雇い外国人」研究で優れた研究業績を有するアメリカ・ミシガン大学のロイ・ハナシロ名誉教授と、鹿児島において観光業を展開されている島津興業株式会社代表取締役で島津家第33代

当主の島津忠裕氏を、基調講演の講師としてお招きしてご講演いただいた。基調講演の後には、ハナシロ名誉教授、島津忠裕氏に加え、外国人材の活用や多様性を意識した社会づくりに貢献されている株式会社清友・株式会社ミエルカ代表取締役の宮之原明子氏、および始良市クリエイティブアドバイザーのサンディー・ユハス氏をお迎えしたトークセッション「近代の鹿児島と現代の鹿児島における世界の見方」をテーマとしたトークセッションを行った。

ハナシロ名誉教授の講演では、明治期における造幣局の設立を素材に、明治政府は、欧州の法や契約の概念を認識した上で、お雇い外国人と良好な関係を構築できたことが、急速な近代化を成功させた理由の一つであることなどが紹介された。また、島津氏の講演では、薩摩藩の近代化と

それに向けた島津家の様々な取組が紹介された。これらの基調講演を踏まえたトークセッションでは、わが国の少子化や都市部への人材流出が、わが国や鹿児島における最も深刻な危機であるとの指摘がなされた。また、わが国では先人たちが、外国人材を有効に活用して、幕末・明治初期に到来したわが国の独立を脅かすような危機を乗り越えたこと、現代においても、外国人

材を活用することにより、企業の経営危機のみならず、国家の経済危機を乗り越えた事例があることが紹介された。これらのことを踏まえたシンポジウムの総括として、登壇者から、少子化や地方の過疎化による地域的課題を乗り越えるためには、多様な人材を受け入れられる社会づくりが不可欠であるとの提言がなされた。

これからの日本、そしてこれからの鹿児島の経済・経営、外国との関係の結び方について考える。

〈危機〉の時代における 海外へのまなざし

— 明治と現代、そして鹿児島 —

2024年 11月4日 月・祝
13:30~17:00 (開場 13:00)

会場 鹿児島大学 キミ&ケサメモリアルホール (稲盛会館)

参加費無料

会場での参加を希望される方は10月27日までお申し込みください。

オンラインでの参加を希望される方はお申し込みは不要です。

お問い合わせ先
「鹿児島の近現代」教育研究センター
TEL: 099-285-7532 E-mail: kugendajm@lib.kagoshima-u.ac.jp

主催 鹿児島大学文学部国際・地域研究センター
後援 NBC日本放送 KTS鹿児島テレビ KX鹿児島放送 KYT鹿児島ケーブルテレビ 鹿児島県教育委員会 鹿児島市教育委員会 博日本報社 鹿児島観光コンベンション協会 鹿児島観光推進協議会 鹿児島市商工会館 鹿児島大学国際連携推進センター

国立大学法人 鹿児島大学 KAGOSHIMA UNIVERSITY



連続トークイベント #昭和99 第1回
木脇藤次郎が見た昭和 2024年6月29日(土) 鹿児島市天文館図書館
「鹿児島近現代」教育研究センター センター長 丹羽 謙治

トークイベントの第1回として、昭和6年(1931)の『木脇藤次郎日記』(鹿児島大学附属図書館 木脇家文書)から晩年の藤次郎(1859-1932)の生活を紹介した。藤次郎は〈文化官僚〉として活躍した木脇啓四郎(1817-1899)の次男で、沖縄師範学校の書記、浪速銀行など銀行に勤め、退職後は玉里島津家邸で蔵書の整理・管理、筆耕などに従事した。

日記は博文館刊の日記に鉛筆で詳細に記録が認められており、購入した物の金額も記録されていて、当時の鹿児島の中層の日常生活を知ることができる貴重な資料である。

この年は木脇家にとって「事件」の多い年であった。三女春子の結婚と朝鮮の鉾山で技師として働いていた長男一家の帰国である。三女の春子が伊集院兼清と結婚、その準備に奔走する日々が続く。照国神社での挙式、写真撮影、披露宴、自動車による送迎など現代の結婚式にもある方式で行われていることが確認できる。神前結婚式は大正天皇が皇太子時代に行われた形が一般に普及したものとされるが、まだなじみのないものだったのか、「余り複雑な式法にて皆抜けありて跡にて大笑ひとなれり」と記されている。長男祐之一家の帰国は、日本政府の緊縮政策に依るもので、藤次郎は珍しく民政党政権への批判を漏らしている。

日記には前年から問題になっていた城山自動車道路開通についても触れている。当時、観光のために城山に自動車道路を建設することが、市長と在郷軍人会を中心に進められていたが、自然保護の観点や西南戦争で多くの先人の血が流れた聖地に自動車が乗り入れることへの反発などで大反対運動に発展していた。1月12日藤次郎は鹿児島新聞の池田米男とともに現地に赴き、批

判を受け計画変更中の担当者より説明を受けたが、藤次郎は「樟樹など九本とは世間の誤り、二本位しか邪魔なるものはなし。夫も一本は疑問として残さるゝ筈など話あり」と冷静である。

この他、島津斉彬の時代に設置された「墨所」「筆所」について関係者を訪問しての聞き取り調査、玉里島津家の蔵書の管理の様子など郷土史家としての側面についても紹介を行った。

付記

トークイベントの後で、『鹿児島新聞』の大正5年(1916)12月16日3面に「照国神社拝殿での結婚式 当地では嚙矢」という見出しの記事を見つけた。当時東京では行われつつあった神前結婚式が照国神社拝殿で初めて行われたという記事。木脇春子と伊集院兼清との結婚から遡ること15年である。

連続トークイベント #昭和99 第2回

知覧の戦中・戦後

「鹿児島県の近現代」教育研究センター 特任准教授 伴野 文亮

2024年8月11日（日）に、南九州市にあるミュージアム知覧において、連続トークイベント「#昭和99」の第2弾として「知覧の戦中・戦後」（後援：南九州市）を開催しました。当日は、2つのセッションに分けて、戦前から戦後にかけての知覧の地域史を深掘りしました。

第1部は基調講演として、伴野が「一次史料から知覧の戦中・戦後を考える」と題して講演を行い、県立川辺高等学校が所蔵する旧制川辺中学校時代の日誌や写真帖などを紹介しながら、一次史料の保全と活用を基礎とした地域史研究の意義と重要性について語りました。第2部はトークセッション「知覧の戦中・戦後」として、弊センターの中嶋晋平特任助教と知覧特攻平和会館の八巻聡学芸員がファシリテーターとなり、「特攻」をめぐる地域の歴史像や、戦争の「記憶」の継承の方法について、鹿屋における事例との比較を踏まえながら、フロアの来場者も交えて議論しました。来場者からは、知覧飛行場の建設に直接携わったときの経験談や、戦争遺児を対象とした「記憶」の継承のあり方に関する問題提起などがなされました。

今回の企画を通して、鹿児島県そして日本の近現代史を考える上で欠かせない知覧という「場」の研究を深化させることが出来ました。今後は、今回の企画を基盤として、人びとの「記憶」を含めた多様な一次史料の収集と保全に意を用いながら、知覧の戦中・戦後の歴史像を研究し、教育に活かす取り組みを続けていきたいと考えています。今後とも、皆さまのお力添えをよろしくお願い申し上げます。

なお、当日の様子は、弊センターの公式

YouTube チャンネル

(<https://www.youtube.com/@%E9%B9%BF%E5%85%90%E5%B3%B6%E3%81%AE%E8%BF%91%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E6%95%99%E8%82%B2%E7%A0%94>)

にて公開していますので、ぜひご覧ください（検索バーに「鹿児島県の近現代 知覧」と入力すれば、すぐに出てきます）。



昭和20年頃の知覧を語らい、未来へつなぎませんか？

（第2回）「鹿児島県の近現代」連続トークイベント「#昭和99」in 知覧

知覧の戦中・戦後

2024年は「昭和99」に当たる年です。本イベントでは「知覧の戦中・戦後」をテーマに、知覧における戦争体験や戦後経験について参加者と共に語り合い、戦争の記憶を次の世代に伝えます。知覧の戦中・戦後に関心のある方、ご自身の体験や記憶を語りたい方のご参加をお待ちしています。

2024年

8月11日

13時～15時30分（開場12時30分）

会場 ミュージアム知覧（シアター室）

参加費 無料

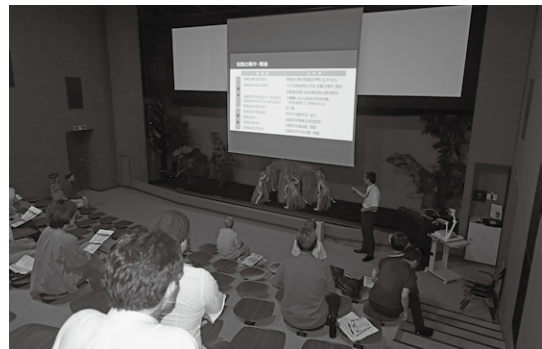
予約不要

先着150名

【プログラム】

- 13:00～13:05 開演、開会挨拶（川崎弘一 知覧特攻平和会館長）
- 13:05～13:45 基調講演「一次史料から知覧の戦中・戦後を考える」
（伴野文亮 「鹿児島県の近現代」教育研究センター・特任准教授）
- 13:45～14:00 （休憩）
- 14:00～15:20 トークセッション「知覧の戦中・戦後」
八巻聡 知覧特攻平和会館・学芸員
中嶋晋平 「鹿児島県の近現代」教育研究センター・特任助教 × 会場のみなま
- 15:20～15:30 閉演、閉会挨拶（丹羽謙治 「鹿児島県の近現代」教育研究センター・長）

主催：鹿児島大学法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センター 後援：南九州市



鹿児島市立図書館 第2回図書館講座 「鹿児島の近現代」連続トークイベント「#昭和99」
「昭和の鹿児島：経済成長への『開発』と人々の生活」
 「鹿児島の近現代」教育研究センター 特任助教 日高 優介

令和6年9月14日、鹿児島市立図書館にて連続トークイベント「#昭和99」の第3回となる「昭和の鹿児島：経済成長への『開発』と人々の生活」を開催しました。本イベントは鹿児島市立図書館の図書館講座第2回として開講され、多くの方にご来場いただきました。

今回、焦点を当てたのは昭和の後期と現代です。より具体的には、①昭和40年代にはじまった喜入町（現鹿児島市喜入）の石油備蓄基地開発計画とその拡大の停止。②昭和40年代後半にはじまる奄美大島宇検村の石油基地誘致計画をめぐる住民運動「枝手久闘争」。そして、③現在、鹿児島市のニュータウン（郊外団地）で進行している高齢化による「限界ニュータウン」問題。以上の三点です。

一見、最初の2つと最後の問題は時間的にも空間的にも異なる印象を与えるかもしれませんが、「#昭和99」というタイトルに現在の話をすることに違和感を持つかたもいらっしゃるかもしれません。しかし、これらに共通するのは現代において大きな人口ボリュームを占める団塊世代の人々の存在です。

紙幅の都合で上記について詳細に説明することはできませんが、人口ボリュームという規模のみならず、令和の現代社会についてもこれらの人々は大きな存在感を示しています。「懐かしの風景」や「懐かしの音楽」といった懐古的な振り返り（それはそれで、とても面白く重要であるとは思いますが）ではなく、現代社会（=令和）について考えるうえで、過去（=昭和）を参照するというのが本講の視座でした。

連続トークイベントは昭和64年で終わっ

た「昭和」のみを対象としたわけではありません。「#昭和99」というタイトルが示すとおり、元号はかわりつつも現代にはまだ様々な「昭和」が続いています。本年は昭和100年です。この節目に先駆けて皆様とお話しさせていただくという貴重な機会を得たことに感謝します。

このような場を与えてくださった、鹿児島市立図書館様。そして、開講にあたりご尽力くださった指導主事の山口晴美様に重ねてお礼申し上げます。

鹿児島市立図書館 第2回図書館講座
 「鹿児島の近現代」連続トークイベント「#昭和99」
**昭和の鹿児島：経済成長
 への「開発」と人々の生活**
 昭和の後期、鹿児島の経済成長と開発計画、郊外住宅地の発展、生活の変遷について考えます。

講師：日高 優介 特任助教
 （鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター）

日時：9月14日（土）14:00～15:30
 会場：市立図書館2階 AVホール
 対象：どなたでも
 定員：30人（先着申込順）
 申込方法：申込用紙、はがき、FAX、Eメールで（氏名）（住所）（電話番号）を明記。
 ※申込用紙は受付カウンターまたはホームページから。

（申込み・問合せ先）
 鹿児島市立図書館
 〒890-0063 鹿児島市鴨池二丁目 31-18
 電話 099-250-8500 FAX 099-250-7157
 Eメール tosyo-tosyo@city.kagoshima.lg.jp
 3時間無料の駐車場があります。



#昭和99④「終戦直後の鹿児島と奄美出身者」

「鹿児島近代」教育研究センター 特任助教 中嶋 晋平

令和6年10月14日、鹿児島県立図書館第1研修室で連続トークイベント「#昭和99」の第4回「終戦直後の鹿児島と奄美出身者」を開催した。当日は筆者のほか、戦争を語り継ぐ遺児の会の代表で、奄美出身の吉見文一さんにもご講演いただいた。

終戦直後、鹿児島港は奄美群島や沖縄を中心とする南西諸島への帰還者の送出港に指定された。これにより、戦時中に故郷を離れた奄美の人々は、帰郷のため鹿児島市を目指した。ところが昭和21年3月17日、GHQは突如、鹿児島大島間の渡航を6ヶ月間禁止する。その結果、奄美出身者は帰郷することができず、鹿児島の地で様々な選択を強いられることになる。終戦から軍政期という過酷な時代を奄美の人々はどのように生き抜いたのか。このことをテーマに講演と意見交換を行った。

まず、戦時中から軍政期までの少年期を徳之島で過ごした吉見さんにご講演いただいた。吉見さんの父親は昭和18年にニューギニアで戦死され、吉見さんは父親の顔を知らないまま、母一人子一人の貧しい生活を軍政期の徳之島で過ごした。その後、父親の手紙との出会い、ニューギニアへの訪問、家族の働きかけにより、戦争の事実を伝えなければならないと令和4年に戦争を語り継ぐ遺児の会を設立、精力的に活動されてきた。会場では戦死した奄美出身の兵隊が遺した日の丸の国旗などが披露され、戦中・戦後にわたって奄美の人々が過酷な生活を強いられたことを話された。

続けて筆者は、同郷者メディア『奄美』を用いて、終戦直後に本土部の鹿児島に残された奄美出身者の実態について講演を行った。『奄美』には渡航禁止の間、同郷者同士で助け合い、懸命に命をつなぐ奄美出

身者の姿が描かれていた。また一部の奄美出身者は帰郷を断念し、鹿児島周辺での生活再建を決意、それが鹿児島市をはじめとする周辺地域の変容を促したことを説明した。

その後は参加者との意見交換に移り、昭和30年代に甲突川周辺に奄美出身者と思われる人々がバラックで生活していたことなどが話され、失われつつある終戦後の鹿児島の記憶を記録として残していくことの重要性が確認された。



撮影 平岡正三郎氏

(第4回)「鹿児島近代」連続トークイベント 「#昭和99」

終戦直後の鹿児島と 奄美出身者

戦後の鹿児島のこと、語り継ぎませんか？

2024年

10月14日(月祝)

14時～16時(開場：13時30分)

場 所 鹿児島県立図書館(第1研修室)

※駐車場は利用できません。公共交通機関
でお越しください。

参加費 無料

どなたでもご参加いただけます

講 演 吉見文一 (戦争を語り継ぐ遺児の会・代表)

話題提起 中嶋晋平 (鹿児島大学・特任助教)

主催 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島近代」教育研究センター

お問い合わせ 鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島近代」教育研究センター
☎ 099-285-7532 ✉ kingendajim@leh.kagoshima-u.ac.jp



連続トークイベント#昭和99 地域シンポジウム

“沖永良部の昭和”

法文学部法経社会学科経済コース 准教授 澤田 成章

本センターは、法文学部澤田ゼミと共催で令和6年12月6日、知名町役場（フラワーホール）および和泊町役場（結いホール）にて地域シンポジウム“沖永良部の近現代”―沖永良部の昭和―を開催いたしました。本イベントは2022年度から継続的に実施してきた地域シンポジウム“沖永良部の近現代”の第3回であるとともに、「鹿児島近現代」連続トークイベント「#昭和99」の一環としても位置付けられています。また、シンポジウムに先立ち、12月5日には沖永良部高校体育館をお借りして、1年生に向けたポスターセッションによる交流会を開催しました。

交流会では、澤田ゼミ学生4名+教員2名が合計12枚のポスターを体育館に並べ、それぞれが2～3枚を担当し、地域マネジメント事業としてこれまで取り組んできた研究成果について高校生と議論しました。



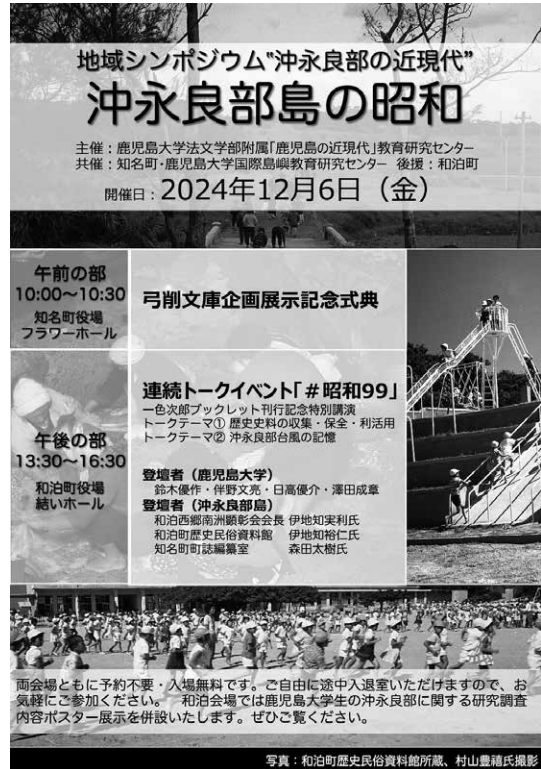
6日知名町役場で開催された午前の部では、今井町長・丹羽センター長のあいさつのちに、知名町の代表者から弓削文庫の知名町への寄贈に至る経緯や弓削先生の史料に対する思いなどが紹介されました。また、法文学部澤田より2024年8月に実施された弓削文庫整理事業の紹介があり、最後に田中教育長にご挨拶いただきました。弓削政己氏が知名町に寄贈された史料が一部展示されたほか、ポスター展示や弓削文庫粗目録（作業途中版）の回覧などもあり、知名町役場新庁舎1階のフラワーホールは延べ40名程度の参加者により埋め尽くされました。



和泊町役場で開催された午後の部は3つの話題で構成されます。丹羽センター長からの開会あいさつ、および和泊町の川畑副町長からのごあいさつに続き、本センター鈴木特任助教より、ブックレットの刊行を記念して一色次郎に関する特別公演がありました。『東京空襲』の記述などから、一色の作風の変化について考察され、“実話と小説のけじめ”や“薩摩と琉球”といった一色の両面性に関してフロアとの議論が盛り上がりました。

続くトークテーマ①歴史資料の収集・保全・利活用では、本センター伴野特任准教授がコーディネーターとなり、和泊町歴史民俗資料館の伊地知裕仁氏・知名町町誌編纂室の森田太樹氏に登壇いただきました。戦争関連の歴史資料や記憶の収集・保存をどのように考えていくか、女性の戦争体験をどのように集めていくかといった昭和の歴史資料についての議論だけでなく、町誌編纂に伴って収集された史料群についても今後の保存・利活用を含め活発な議論がありました。

続くトークテーマ②沖永良部台風の記憶では、和泊西郷南洲顕彰会会長の伊地知実利氏に登壇いただき、本センター日高特任助教および法文学部澤田が聞き手となって沖永良部台風当時のお話を伺いました。伊地知氏は沖永良部台風襲来時に和泊町役場で教育委員会の若手職員として勤務していました。当時の被害の状況や、そこからの復旧に向けての人々の助け合いや協力体制について、様々な角度からお話を伺いました。澤田からは「人口減少が続く沖永良部において当時と同じような避難・復旧が今でも可能なのか。テクノロジーによって可能なことが増えた一方、島の衰退によって不可能なことも増えたのではないか」という問題意識から議論を行いました。日高特任助教からは、「2027年に沖永良部台風襲来から50年が経過する。当時を知る大人が亡くなってしまいう前に聞き書きなど様々な形で当時の記憶を記録にしていかなければならない」と、沖永良部台風の記憶を後世に伝えるための新プロジェクトの構想が語られました。



地域シンポジウム「沖永良部の近現代」
沖永良部島の昭和

主催：鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター
共催：知名町・鹿児島大学国際島嶼教育研究センター 後援：和泊町
開催日：2024年12月6日（金）

午前の部 10:00～10:30 知名町役場 フラワーホール	弓削文庫企画展示記念式典
午後の部 13:30～16:30 和泊町役場 結いホール	連続トークイベント「#昭和99」 一色次郎ブックレット刊行記念特別講演 トークテーマ① 歴史資料の収集・保全・利活用 トークテーマ② 沖永良部台風の記憶

登壇者（鹿児島大学）
鈴木優作・伴野文亮・日高俊介・澤田成章
登壇者（沖永良部島）
和泊西郷南洲顕彰会会長 伊地知実利氏
和泊町歴史民俗資料館 伊地知裕仁氏
知名町誌編纂室 森田太樹氏

両会場ともに予約不要・入場無料です。ご自由に途中入室いただけますので、お気軽にご参加ください。和泊会場では鹿児島大学生の沖永良部に関する研究調査内容ポスター展示を併設いたします。ぜひご覧ください。

写真：和泊町歴史民俗資料館所蔵、村山豊福氏撮影

天文館図書館共催 連続トークイベント #昭和99 第6回

鹿児島が生んだミステリ評論家 中島河太郎

「鹿児島の近現代」教育研究センター 特任助教 鈴木 優作

2025年1月18日（日）、天文館図書館にて #昭和99トークイベント第6回「鹿児島が生んだミステリ評論家 中島河太郎」を開催した。

鹿児島市に生まれ旧制七高造士館を総代で卒業した中島は、戦後に書誌作成・辞典の編纂執筆・解説や評論の執筆と探偵小説史に多大な貢献を果たしたが、一般に作家に注目が集まりがちのため改めて評価する余地が大きい。本イベントではまず中島の経歴、次いで国文学者・民俗学者・教育者としての側面、また『探偵新聞』『黄色の部屋』『探偵小説年鑑』『探偵小説辞典』『日本推理小説史』といった探偵小説・推理小説に関わる業績を辿った。次に江戸川乱歩との関係から探偵小説史の構築者としての役割を振り返り、文学史は作家のみによって成立するのではなく作家・作品を批評し整理する視点があって初めて成り立つことを論じた。そして、鹿児島についての随筆から中島の故郷への愛着心について述べた。さらに七高文芸部の雑誌『啓明』への寄稿などから小説・民俗学・短歌・俳句といった中島の多彩な文才について一次資料を提示して紹介した。最後に中島の90年代における発言を取り上げ、社会派推理小説やその後の推理小説界にはキャラクター性のある名探偵が欠けていること、名探偵の待望を唱えていたことに触れた。

会場は先着40名のところ当日参加を含めてほぼ満席となり、質疑応答も数多く交わされた。中島の再評価は、鹿児島出身の文学者の評価であると同時に、作家に偏重しがちな文学史における評論家・書誌学者の重要性の再認識に繋がると考えられる。

なお本イベントの開催にあたり中島河太郎の子息・中嶋淑人氏に資料提供をはじめとして多大なご支援を賜った。この場を借りて心より感謝を申し上げる。



カターニア大学・フィレンツェ大学・ボローニャ大学講演レポート 「鹿児島県の近現代」教育研究センター 特任助教 鈴木 優作

2024年11月9日から21日にかけて、稿者はイタリアのカターニア大学・フィレンツェ大学・ボローニャ大学で講演を行った。本企画は本センター2023年春のシンポジウム「日本とイタリア—社会と文化の諸相」においてご講演頂いたフィレンツェ大学鷺山郁子教授とのミステリを通じた縁から始まったもので、JSPS 科研費23K18653の助成を受けている。

カターニア大学では『日本近代詩の発展過程の研究』（翰林書房）の著者ルカ・カッポンチェッリ先生との交流があり、12日に「探偵小説・都市・精神病——江戸川乱歩と東京・小酒井不木と京都——」と題した講演を行った。大雨警報のため生憎のオンライン開催となったが、20名程度の参加者を得られた。

フィレンツェ大学では15日に「日本とイタリア ミステリ文学の対話」と題した国際シンポジウムが開催された（本センター協催）。鷺山元教授をコーディネイターに、江戸川乱歩『白髪鬼』『孤島の鬼』の伊訳者ディエゴ・クチネッリ准教授をはじめ哲学・文学研究者が登壇し、収容定員の90名を超える聴衆が集まった。稿者は「日本探偵小説と優生思想——江戸川乱歩・夢野久作——」と題した講演を行い、他登壇者および聴衆と活発な質疑応答を行った。

ボローニャ大学では「探偵小説における〈通俗〉と〈啓蒙〉——江戸川乱歩「緑衣の鬼」から——」と題した講演を行い、こちらも定員の100名に近い参加者があった。現代日本ミステリに造詣の深い同大学学部長パオラ・スクロラヴェッツァ教授や、綾辻行人『十角館の殺人』などの伊訳者であるステファノ・ロチーニ講師と日本現代ミステリについて意見を交わす機会にも恵ま


れた。同大学は日本においてイタリア・ミステリの代表作として知られる『薔薇の名前』の著者ウンベルト・エーコが教鞭を執っていたこともある。

ここに全ての名前を挙げることはできないが、滞在中に出会い、様々に助けて頂いた皆さまに、心より感謝を申し上げる。

Il romanzo di investigazione: città e psicosi.
Edogawa Rampo e Tokyo
Kosakai Fuboku e Kyoto

Suzuki Yūsaku, Università di Kagoshima
Martedì 12 novembre ore 16,00-18,00
Aula 2 - S. Teresa, Ragusa Ibla

探偵小説・都市・精神病
江戸川乱歩と東京・小酒井不木と京都
鹿児島大学 鈴木優作



Organizzatore: Luca Capponelli

25 ANNI
L'UNIVERSITÀ DI RAGUSA

Uni ct SCIENZE UMANISTICHE Uni ct STRUTTURA DIDATTICA SPECIALE DI RAGUSA

CONVEGNO INTERNAZIONALE
Il romanzo mystery tra Giappone e Italia
15 novembre 2024 (venerdì) | Ore 9:30
FORLÌ/FPI - Aula Magna

Programma

Sezione I
10:30-10:45
10:45-11:15
11:15-11:30

Sezione II
11:30-12:00
12:00-12:30
12:30-13:00

Coordinatore Organizzativo:
Suzuki Yūsaku
Diago CUCINELLI
Luca FRIZZA
YOSHIDA Ayano

FORLÌ/FPI

Senso popolare e presa di coscienza nella detective fiction: "Il demone dal manto verde" di Edogawa Rampo

SUZUKI YŪSAKU
UNIVERSITÀ DI KAGOSHIMA

19 NOVEMBRE 2024, ORE 15:00
AULA MAGNA
VIA FAUSTO SOLEMI
BOLOGNA



口之津・大牟田・荒尾・盤山：鹿児島県の「移住」をめぐる問題提起 「鹿児島の近現代」教育研究センター 特任助教 日高 優介

「そうですか、いなくなりましたか」

1月3日、福岡県大牟田市にある与州奥都城でおこなわれた新春初詣に参加させていただいた。同所は大牟田・荒尾地区与論会の共同納骨堂である。この日は、初詣と銘打たれてはいるものの、様々な年代の参加者は納骨堂の先祖に手を合わせ、旧知と交流していた。会場には、これまでの大牟田・荒尾地区与論会に関連する写真のアルバムが数十冊展示され、設置されたテレビでは与論島に関するDVDが放映されていた。与州奥都城が共同納骨堂としてのみならず、大牟田・荒尾地区与論会の交流の拠点であることを垣間見た。

冒頭の見出しの言葉は同会の朝岡光男会長に鹿児島県錦江町の盤山集落の住人がいなくなったことを伝えた際の返答だ。口之津・大牟田・荒尾、そして盤山。これらは何れも与論から移住した人々が住んだ場所である。

口之津・大牟田・荒尾・盤山

与論島の中心地に近い海岸に「移住 開拓の月」という記念碑がある。同碑には「口之津・大牟田・荒尾・盤山」という移住者たちが移り住んだ土地の名が記録されている。

近代以降、与論島の人々は島外へ複数回大規模な移住をおこなった。代表的なものは、126年前の1899年（明治32）の台風被害による飢饉と赤痢の蔓延に端を発し、明治以降の日本の近代化という社会的需要に取り込まれた移住だ。三池炭鉱の石炭の積み出し港であった長崎県の口之津（現 南島原市）へと移住し、その後、三池港の開港に伴い福岡県の大牟田市や熊本県の荒尾市へと再移住した。先の大牟田・荒尾地区与

論会は、この移住者の子孫たちによる郷友会組織であり、現在では5世と呼ばれる若い人々も行事に参加している。移住者たちの苦難は川西到・森崎和江『与論島を出た民の歴史』（1971 たいまつ社 = 1996 葦書房）や、南日本新聞社編『与論島移住史—ユヌの砂』（2005 南方新社）、川井龍介『「十九の春」を探して うたに刻まれたもう一つの戦後史』（2007 講談社）、井上佳子『三池炭鉱「月の記憶」：そして与論を出た人びと』（2011 石風社）に詳述されている。

盤山への移住について、盤山は二つの土地を指す。一つは1944年（昭和19）に国策により入植した満州国錦州省盤山県（現 中国遼寧省盤山県）であり、もう一つは1945年8月8日の日ソ開戦によって日本に引き揚げたこの移住者たちが、再入植しその名を付けた田代町（現 錦江町）の盤山集落である。与論島民の盤山入植については、前述の書籍においても言及されているほか、南日本新聞社編『鹿児島戦後開拓史』（1999 南方新社）において、第1章に置かれている。

苦難の開拓を経て、盤山は名茶「盤山茶」の産地として有名になった。しかし、2016年10月18日の南日本新聞の記事では最盛期250人いた住民は、3世帯9人に減少し、茶価格の低迷などを理由に離農が増加しているとある。昨夏、筆者が盤山を訪問した際、出口英樹准教授を通じて錦江町役場に居住状況を確認したところ、居住者はいないとの回答を得た。訪れたのは盆のあとであり、墓地は綺麗にされ花が活けてあった。ある家族の霊標からは、1945年（昭和20）の8月20日に52歳から8歳まで5人が亡くなったことが確認できる。多くは語られていない盤山の深い歴史が伺える。近年の盤

山への眼差しとして、南大隅支局に赴任した南日本新聞の記者たちがたびたび関心を寄せていたことが同紙の「記者の目」欄からも確認できる。また、錦江町の広報誌「広報きんこう」2020年12月号に「与論町との姉妹盟約から半世紀 後世に継ぐ開拓魂」と題された特集が掲載されており、貴重な写真資料やインタビューから与論開拓団の歴史が語られている。特筆すべきこととして、2009年の奈良大学主催「第3回 全国高校生歴史フォーラム」にて優秀賞を受賞した志布志高校の生徒による「じいちゃんたちの「拓魂」～鹿児島県錦江町田代「盤山地区」の研究～」がある。同レポートは盤山住人へのインタビュー調査から構成されており、盤山の歴史が丁寧に整理されている。やや話題は逸れるが、昨年末、モデルの水原希子とローラが耕作放棄地となった盤山の茶の実をつかったヘアオイルを製作したことが発表された。その際、盤山の苦難の歴史についての言及が確認できる。盤山への入力の歴史は人々に強い印象を与える。しかし、どのように盤山から人がいなくなったかについては現時点で明らかにされていない。

問題提起

本稿は副題に「問題提起」の一語を用いた。本稿の最後に簡潔に示したい。お気づきの方もいるだろうが、上記で挙げたいくつかの文献をみてもわかるように、学術領域からの接近が十分ではないということだ。本県の近現代を捉えるうえで「移住」はキーワードであると考え。宇検村の伯国（ブラジル）橋、都城の大島紬、喜入の石油備蓄基地へ異動してきた都市のエリート、阪神大震災と神戸沖洲会、興行ビザで入国したフィリピン人女性、外国人技能実習生、高校より先の進学先が地元でない地方の高校生、人口減少地域のIターン、U

ターン移住促進。人々の「移住（移動）」についての様々な状況があり、それは今日においても継続している。

隣県の沖縄では沖縄県立図書館が海外移民のルーツを調べる「Finding Okinawan Roots!」が取り組まれているほか、琉球大学には「沖縄移民研究センター」が設置され多くの資料が収集され、地理学、社会学、歴史学、心理学、民俗学、文学、言語学、国際関係論からの研究が蓄積されている。本県においても「移住」をめぐる諸対象について、多角的な視点から検討を進める必要があるだろう。



写真1：与論島「移住 開拓の月」石碑



写真2：錦江町盤山集落 盤山茶耕作放棄地

世界に誇る鹿児島県の食文化～桜島大根～

農学部 研究教授 加治屋 勝子

鹿児島県が世界に誇る活火山、桜島。その麓で収穫される桜島大根は、世界一大きな大根（重量31.1 kg、胴回り119 cm）として2003年にギネス認定されていた。「されていた」と過去形になっているのは、2023年に45.365 kgのジャンボ大根に記録を塗り替えられたからである。しかしなお、食べられる大根として市場に出回っている大根の中では、桜島大根が世界一大きいということに変わりはない。この桜島大根の魅力と食文化について紐解いてみたい。

1709年刊行の大和本草（日本最初の本草学書とされる）に「薩摩大根は常のより大なり」と記され、1804年刊行の成形図説（農業書）に初めて桜島大根の写生図が掲載されている。しかし、「櫻島菘」と書かれたそれは、現在の桜島大根独特の形である紡錘形、球形、扁球形ではなかった。今に受け継がれている丸みを帯びた形は、生産のしやすさや形の美しさにより長い年月をかけて選抜されたものだとされ、辛味の無い甘くてきめ細かな食感と共に、その形は桜島大根の象徴となっている（写真）。

私は「どうしたら健康な体のままで寿命を全うできるか」ということに主眼を置き、数十兆個の細胞から成るヒトの体に必要な酸素や栄養を行き渡らせている「血管」の研究をしている。健康な血管は、ゴムホースのようにしなやかに伸び縮みすることで心臓と協力して血液を輸送しているが、硬くなった血管は血行不良を引き起こす。この小さな血行不良が、冷え症や片頭痛の原因となったり、高血圧や動脈硬化を併発したり、心筋梗塞や脳梗塞を引き起こす恐れがある。正常な血管機能を保つための食材探しをおこなう中で、数百種類の農水畜産物の中から運命的な出会いで桜島大

根に辿り着いた。桜島大根には「トリゴネリン」という機能性成分が他の野菜よりも多く含まれており、血管機能を改善する仕組みの一端も解明した。この研究成果は、世界最大の学術団体であるアメリカ化学会から、桜島大根の常識外の大きさを表した「モンスターラディッシュ」という言葉で全世界に発信された。

桜島大根は、サラダやおろしとして生で食べたり、しゃぶしゃぶにしたりもできるが、繊維の並び方が他の大根とは異なるため、味がしみ込みやすいのに煮崩れしにくく、おでんやブリア大根をはじめとした煮物料理に向いている。以前の桜島では、ザルですくえるほどのキビナゴが獲れたため、桜島大根のなますにキビナゴを入れる料理も食べられていた。また、アオサ汁には普通は豆腐を入れるが、豆腐の代わりに桜島大根を入れて食されてきた。最近では、カレーに入れたり、グラタンのマカロニの代わりにやマーボー丼の豆腐の代わりに使われたり、天ぷらや唐揚げにして（さらに桜島小蜜柑の塩を足すと美味）食べられている。また、旬の時期が短く1～2月に収穫された桜島大根は、漬物や干し大根などに加工されて一年中食べられるように工夫されてきた。このように、調理・加工することが多い桜島大根であるが、加熱や冷凍によるトリゴネリンの損失は8%程度であり、味も美味しい上に、血管にとっても十分な量のトリゴネリンを摂取することができる。

桜島大根の加工品は、私達の研究成果を発表して以降、大根おろしのフリーズドライ、雑炊、ゼリー飲料、和菓子、氷菓子、チップスなどが次々と上市し、総菜やレストランメニューとしても、昔ながらの大根

飯や大根餅、みぞれ鍋等に加えて、春巻きやポタージュスープ、タルトタタンなど、これまでには見られなかったメニューが続々と食べられるようになった。

同じ鹿児島県でありながら、伝統野菜である桜島大根を食べる機会は少なく、地域の「食文化」を残して守っていくためには、ある程度の覚悟を持って努力しなければいけないのだと考えさせられる。そうしないと、地域の伝統的な果物や野菜は瞬く間に消えて行ってしまう。コロナ禍で注目されるリモートワークやWEB会議と、従来の対人関係を、どう組み合わせるかという視点で食文化を育てていくことが今後の課題である。料理は誰と食べるかでおいしくもなり、味気ないものにもなる。人と人、対人関係をつなぐ上でも、もっと「食文化」に注目してほしい。



(シーズンになると研究室前にずらっと並ぶ桜島大根達)

【資料紹介】明治40年の『鹿児島県写真帖』

法文学部人文学科 准教授 小林 善仁

1. はじめに

19世紀にヨーロッパで成立した写真の技術は、幕末期には日本へ伝来した（日本写真家協会1971）。安政4（1857）年9月に鹿児島城内で撮影された「島津斉彬銀板写真」は、日本で最初期の人物写真として知られ、鹿児島城（鶴丸城）内の建物の写真も伝わる。このように、鹿児島と写真の歴史は長崎などと並んで古い。

明治初期には、鹿児島城本丸正門の御楼門と御角櫓や集成館の近代的工場群など当時の鹿児島市街地も撮影され、西南戦争に関連した戦地の写真撮影も行われた。こうした場所を写し自然と人文の情報を記録する貴重な資料は「地理写真」（石井1988）とも呼ばれ、地域を研究する際の資料として用いられてきている。

筆者は本センターの「地域マネジメント教育研究事業」のなかで、「近代鹿児島プロジェクト」と題し、旧城下町である近代の鹿児島市街地に関する調査と研究に組み込み、その一環として関連する史資料の掘り起こしと収集を行ってきた。今回紹介する明治40（1907）年に発行された『鹿児島県写真帖』（鹿児島大学法文学部所蔵）も上記の経緯で収集した資料の一つである。

2. 明治40年の『鹿児島県写真帖』

明治40（1907）年、韓国を視察した皇太子の嘉仁親王は、その帰途に九州から中国・四国地方を行啓した。このうち、10月26日から30日にかけて鹿児島県に滞在し、磯の島津忠重公爵邸を旅館として鹿児島県庁、第七高等学校造士館、鹿児島県物産陳列場、城山など鹿児島市内外の各所を視察した。行啓を報じる「鹿児島新聞」同年10月28付に「県庁御成」と題する関連記事が

見られ、鹿児島県からの献上品として県治概要・統計書・管内地図・鹿児島市街図・栄之尾温泉写真（説明書付）などが列挙されるなか、旧跡名勝図に続いて「全寫眞帖一帖」と記されている。



図1. 『鹿児島県写真帖』（表紙）

※鹿児島大学法文学部所蔵。

鹿児島県知事の千頭清臣が皇太子に献上した写真帖（白石2018）の原本は現在も皇室に伝わり、宮内庁書陵部図書寮文庫が所蔵すると共に「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」でデジタル画像が公開されている。他にも、『玉里島津家資料』（鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵）と鹿児島県立図書館にも同じ写真帖が所蔵されている（三木2007）が、これらを比較してみると内容に違いは無いものの、表紙の装丁に違いが見られ、花を配した献上本が最も豪華である。一方、鹿児島県側で確認できている写真帖の装丁は良く似ているが、詳細に観察すると模様の違いが認められて興味深い（図1）。

写真帖の奥付に記される関係者の情報には、著作兼発行者に行啓事務総務部長の三宅源之助（鹿児島県鹿児島市平之町）、撮影囑託として杉本代吉、印刷者として児童新聞社社主の関口栄（東京市神田区末広町10番地）とあり、このうち住所記載の無い撮

影者の杉本は大正3（1914）年に『桜島爆発記念写真帖』を発行した杉本写真館（鹿児島市山下町347番地）の館主と同じである。写真帖の発行に当たり、鹿児島の写真館と東京の新聞社の連携が窺える。

最後に目次を見ると、鹿児島市全景（城山より見たる）から龍郷湾まで写真の点数は60で、神代三山陵や歌枕の地（奈毛木杜）から幕末・維新関連の史跡、景勝地、近代的施設の学校や工場まで、撮影地点は名所旧跡だけに止まらない。

3. 城山からの市街地写真

図2は『鹿児島県写真帖』の1枚目を飾った城山展望台から鹿児島市街地と鹿児島湾と桜島を眺める全景写真である。一目見て明らかのように、現在の鹿児島市民・県民にとっては良く見慣れたもので、国内外から鹿児島を訪れる観光客にとっても旅行ガイドブックをはじめ様々なメディアで目にする定番の風景写真の構図と言える。図2は、その嚆矢の1枚でもある。

天保14（1843）年に成立した『三国名勝図会』など近世の文献に描かれる山側から海を眺める風景の構図は、浄光明寺や多賀山からのものであり、現在と同じく城山からの眺めは掲載されておらず、眺望の場所ではない。何より、近世の城山はその名が示す通り鹿児島城の一部であり、誰でも自由に立ち入れる山でもない。

城山からの眺めは上野彦馬による西南戦争に関連した戦地写真などがあるくらいで一般的ではなく、明治32（1899）年の風景写真集『旅の家土産』（第15肥薩之巻）も浄光明寺からの眺望を掲載している。城山からの桜島までの眺めという定番の風景の成立と普及は、城山の公園化と観光地化と密接に関連する。この点は、紙数の都合から今後の課題として別稿に譲る。



図2. 「鹿児島市全景（城山より見たる）」

4. おわりに

本稿の最後に、近代の景観写真と写真帖に関する今後の課題を幾つか記す。まず『鹿児島県写真帖』の分析が必要であり、この点は鹿児島県が作成した同種の写真帖や他府県の写真帖（白石2016・2018、三木2007）との比較・検討により解明されることも多くあるだろう。次に、今回の『鹿児島県写真帖』のデジタルアーカイブ化による画像の公開も望まれる。保存と公開を含む活用の点もまた課題である。

最後に、近代の鹿児島に関する写真などの景観資料の収集と分析も必要である。地元の写真館が撮影した市街地の写真や写真帖などの景観資料は鹿児島県内にもある。

【文献】

- ・白石烈（2016）「明治・大正両時代御手元写真の来歴」宮内庁書陵部紀要67, 53～73頁.
- ・白石烈（2018）「宮内省図書寮における明治・大正両時代御手許写真の整理（附目録）」宮内庁書陵部紀要69, 57～79頁.
- ・三木理史（2007）『世界を見せた明治の写真帖』, ナカニシヤ出版.
- ・石井實（1988）『地理写真』, 古今書院.
- ・日本写真家協会編（1971）『日本写真史1840-1945』, 平凡社.

資料『大牟田・荒尾地区与論会だより』について

総合教育機構 准教授 藤村 一郎

研究の途上で入手した資料について紹介しよう。『大牟田・荒尾地区与論会だより』は1977年8月第1号より現在（2024年9月）まで140号を発行し続ける大牟田・荒尾地区与論会の機関紙である。2024年8月に、同会会長より、1～140号まで貸借した（ただし56、57号欠）。本資料によって「与論島を出た民の歴史」のうち、大牟田・荒尾地区のユンヌ・コミュニティの戦後の活動を把握できるようになった。

そもそも、なぜ与論島の人々が大牟田・荒尾地区に多数居住しているのだろうか。1888年に与論島は大飢饉にみまわれ、1899年より与論島の人々のうちおよそ750人が長崎県口之津へ集団移住した。その後、出炭量を激増させていた三井三池炭鉱の炭鉱労働者不足を補うために、1910年、口之津より福岡県大牟田市へと集団で移住した。ところが、三井三池炭鉱における与論島出身者の労働や生活の環境は劣悪なもので、多層的な差別を被っていたと言わざるをえない。

さて、『大牟田・荒尾地区与論会だより』とは「大牟田・荒尾地区与論会」の結成に伴って発行された。「大牟田・荒尾地区与論会」は次のような目的で結成された。第一は、戦前より存在した与論同志会〔1938年結成〕や与洲奥都城会〔よしゅうおくつきかい 1947年納骨堂の建設にともなって発足した奥都城建設準備世話人会が源流。大牟田・荒尾地区与論会『与論島から口之津へそして三池へ』自費出版、2001年、p44。〕という組織名や組織規則ではコミュニティを維持することが困難となったためであった。会名にある奥都城とは神道でいう墓所を意味し、いわばユンヌ共同墓地の会という意味である。ところが与洲奥都城

会は、「総資本対総労働」と言われた1959～60年の三井三池炭鉱の三池争議において与論コミュニティが分裂したことで、以前のような運営が難しくなっていた。第二に1999年に完全に解体されることになる新港町社宅（通称「与論社宅」）は、実は1970年代中盤より入居者数が減少し、「場」としての与論コミュニティが解体しつつあったことによる。1977年6月1日に与洲奥都城会は組織名を新たに大牟田・荒尾地区与論会として再出発し、同時に入会会則を緩和してより広範囲のユンヌンチュを統合することを目指した〔同上書、p130。当時の堀円治与論会長の筆による〕。三池争議によるコミュニティ分裂や与論社宅の解体を乗り越える新しい組織として結成されたと言えるであろう。『大牟田・荒尾地区与論会だより』は与論島出身者の共同墓地の墓守を主要な任務としつつ、催事の連絡や会員の近況などの情報を提供しつづけ、現在も大牟田・荒尾のユンヌ・コミュニティを支えている。

大牟田・荒尾のユンヌンチュはなぜ差別され、どのように抗ったのか。三池争議において大牟田・荒尾のユンヌ・コミュニティはどのような分裂状態に陥ったのか。その後、彼らはいかなるエスニシティを抱いて生きぬいていったのか、などについては稿を改めることとしたい。

川路家本家・川路利行について

「鹿児島近現代」教育研究センター 客員研究員 下豊留 佳奈

鹿児島で川路姓といえば、初代大警視を務め「日本近代警察の父」と称される川路利良を思い浮かべる方が多いだろう。石碑や看板などが無くあまり知られていないが、川路家の本家は、川路利良宅（鹿児島市皆与志町4131）から徒歩3分ほど（鹿児島市皆与志町3564）の場所にあった。本家は、西南戦争後に東京へ移っている。（※写真1）

川路利良の元で活躍をした本家の人物が、川路利行（嘉永元年3月12日～大正14年1月23日）である。利行の妻の仲子は、薩摩藩士伊東祐典の長男・祐敬の娘だ（祐敬の弟は、海軍軍人の伊東祐亨）。利行の履歴を見ると、利良を支えるように活躍をしていたことがうかがえる。

鳥羽伏見の戦い開戦時には、兵具1番小队小頭として出陣し、その後東海道を經て江戸へ、品川方面と新宿方面との連絡を独力で取り、上野彰義隊敗走後は上総、棚倉、三春、二本松各所に転戦、白川口より会津攻撃に参加、若松城陥落後11月6日に凱陣を申しつけられている。

明治7（1874）年1月15日に東京警視庁が設置されると、同月24日に権中警部に任命された。佐賀で士族反乱が起こると、2月25日には、警視庁より長崎へ出張を申しつけられ、3月21日に内務省より四国へ出張命令、4月12日には慰労のために酒肴を内務省よりいただいている。さらに、明治9年4月6日には正院より金25円下賜されており、鎮圧のために力を尽くしたことが分かる。

西南戦争では、三等大警部として明治10年2月10日に長崎に入ると、同月19日には熊本へ鎮圧に行っている。また、6月15日には別働第三旅団の参謀に任命された。西南戦争で負傷をした利行が、治療中に撮影し

た写真が川路家に残っている。凛々しい顔であり、どこか利良とも似ているように感じる。（※写真2）利行は、宮城県警部長や宮城県農工銀行設立委員など西南戦争後も多方面で活躍している。今後、さらに調べていきたいと思う。



（※写真1）
東京青山墓地にある川路家本家の墓（下豊留撮影）



（※写真2）
川路利行写真「利行 西南戦争負傷長崎陸軍病院療養中」（川路祥代氏提供）

実業補習学校を知っていますか

—嚆矢は鹿児島県だった—

「鹿児島の近現代」教育研究センター 客員研究員 竹村 茂紀

明治26（1893）年4月、現在の日置市吹上町にわが国初となる一つの学校が設置された。日置郡伊作村立伊作女子実業補習学校である。

実業補習学校は、明治26年から昭和10（1935）年まで全国各地に存在し、小学校卒業後、実業に従事する青年に対して小学校の教育とその地域の実業教育（多くは農業）を行う学校であった。昭和10年に青年学校に改組され、昭和23（1948）年の学制改革で青年学校も廃止されたため、今となっては存在を知る人も少ない。

大正9（1920）年『文部省統計摘要』によると、実業補習学校数は全国に10,777校、生徒数は676,195人であった。当時の小学校数は25,625校、中学校数は327校。昭和初期、小学校卒業後中等教育機関に進学するのは全生徒の2割程度だったことを考えると、実業補習学校は小学校卒業後の青年が教育を受ける機会を確保し、地域の教育を担う教育機関として興味深い存在であったといえる。一方で、地域の実情に即して修業期間や教授科目を設定することができ、地域の教育を色濃く反映する教育機関でもあった。

この実業補習学校を全国で初めて設置したのが鹿児島県日置郡伊作村である。全国初、さらに女子教育の嚆矢となった点で注目に値する。鹿児島県における中等教育機関としての高等女学校の設立は、高等女学校令公布から3年後の明治35（1902）年以降であった。決して女子教育が進んでいたわけではない鹿児島県において、女子実業補習学校が地域の教育機関としてスタートしたのは、どのような背景があったのか。

伊作女子実業補習学校の設置に尽力した

のは、村長宇都為栄であった。中野哲二氏の研究によると、宇都は嘉永2（1849）年生まれ、明治22（1889）年に初代伊作村長となり、同38（1905）年に退職したが、大正元（1912）年に再び村長に就任し、大正4（1915）年に辞職した。宇都は戸長時代の明治10（1877）年から16（1883）年の間に小学校4校、分校3校を設置し、さらに女子教育の必要性を感じ、13（1880）年に伊作裁縫学校を設置した。教育事業に高い関心をもっていたのである。伊作裁縫学校を全国初の実業補習学校にしたのは、宇都の慧眼と強いリーダーシップがあったからである。その功績が認められ、藍綬褒章をうけた。明治44（1911）年の『官報』でも400人の卒業生を輩出した記録とともに、「皆能ク質朴ニシテ強健毫モ輕佻ノ風ヲ帯ヒス、他ニ婚嫁シタル者モ亦克ク婦道ヲ守リテ令名アリ、是ヲ以テ自ラ村内ノ婦人ヲ化シ村民ノ学校ヲ重視スルコト亦頗ル篤シ」と記載され、高い評価を受けた。

伊作女子実業補習学校の修業年限は3年であった。実業科目として裁縫・機織をそれぞれ週10時間行った。普通科目は読書（2時間）、作文（2時間）、習字（1時間、2年生は2時間）、算術（2時間、1年生は3時間）であった。修身では、講話や礼節・侍膳・給仕・洒掃なども教えた。また、これに加えて予科を設置した。予科には卒業年齢でありながら小学校を卒業しなかった者が通った。授業は、このあと全国に設置される多くの実業補習学校と同様、小学校教諭が担当したのだろう。

東京日日新聞によると、村の予算歳出総額5,289円36銭のうち約62%の3,298円12銭が教育費であった。伊作村は製紙業も盛ん

で、裁縫の練習に紙を使った。機織の授業では、クラスを織方と繰方に分けて交代制で教えることにより、機織一台を数人で使用できるだけでなく、機織工程全体に全員が通曉できるよう工夫した。

続いて宇都は明治28(1895)年に、伊作男子実業補習学校を設置した。これで鹿児島県内の実業補習学校は、伊作村の2校と鹿児島市内の鹿児島女子実業補習学校の計3校となったが、実業補習学校以外で実業科目を教える学校は鹿児島市内に2校しかなく、伊作村の村長をはじめとする村民の教育熱の高さをうかがい知ることができる。伊作男子実業補習学校では、実業科目として農業と製紙が設定された。村の特産物であった「伊作紙」の改良普及を目的とした全国でも珍しい実業補習学校であった。明治36(1903)年の『伊作村是』には、製糸業を営む家は390戸(全戸数は2,687戸)で、生産額は10万円以上に及び村の輸出品目としては最高額であると記されている。この最重要産業である製紙業発展のために、村は実業補習学校設置と組合理約を制定し貯蓄奨励と紙質の改良をはかった。伊作村では主要産業と実業教育とを密接に関連付けることができたのであった。

明治34(1901)年、鹿児島県内で実業教育費国庫補助法により補助金を交付された実業補習学校は5校、総額1700円だった。そのうち2校が伊作女子実業補習学校と伊作男子実業補習学校であり、補助金合計は950円。鹿児島県に交付された総額の約56%を伊作村が受けていたのである。このとき伊作女子実業補習学校は生徒数127名、伊作男子実業補習学校は生徒数82名であった。

明治35(1902)年、伊作女子実業補習学校は「伊作女子職業学校」に改組され女子教育を継続することになる。

日置市吹上歴史民俗資料館脇には、楮を

煮るための大きな鍋がその面影を伝えている。資料館でお話を伺ったところ、現在では製紙業はほとんど見られなくなったとのことであった。



『日記 阿多郡伊作村役場』(明治26年7月26日)
造士館教授たちが実業補習学校の調査に来たことが記されている。

参考文献

- 『明治三十四年 鹿児島県統計書』(明治36年)
- 相良元三編『現行教育法規』(明治37年)
- 鹿児島県教育委員会『鹿児島県教育委員会月報』No.149(昭和42年12月)
- 鹿児島教育委員会編『鹿児島県教育史下巻』(鹿児島県教育研究所、昭和36年)
- 『官報』第8518号(明治44年11月10日)
- 吹上郷土誌編纂委員会『吹上郷土誌 通史編三』(平成15年)
- 文部省実業学務局編纂『実業教育五十年史』(昭和9年)
- 『東京日日新聞』(明治26年10月6日)
- 中野哲二「宇都為栄伊作村長の女子教育に関する識見」(『鹿児島経済論集』第45巻第1号2004年6月)

鹿児島城下の西郷家屋敷について

「鹿児島の近現代」教育研究センター 客員研究員 友野 春久

西郷吉之介隆永（後の吉之助隆盛）は文政10年（1827）12月7日、下加治屋町山之口馬場で父九郎隆盛と母マサ（椎原権右衛門の娘）の長男として生まれた。島津重豪が調所広郷に藩の財政改革を命じた年である。加治屋町の成立は17世紀後半と考えられ（「古記」鹿児島市史3所収）、街路もこの頃出来上がったのであろう。江戸期の加治屋町は主として下級武士の居住地で、西郷家は先祖代々の所有ではなく譲り受け屋敷になる（「西郷家万留」）。天保13年（1842）城下絵図の現在地加治屋町5番街区に祖父龍右衛門（嘉永5年・1852年没）がみえるのでこの頃の購入かも知れない。明治5年に導入された市街地地券・郡村地券などの「地券之證」いわゆる壬申地券の同地の所有者は未詳であるが、それに続く明治22年運用開始の「旧土地台帳」をみると、誕生地地番は加治屋町137のイ番300坪になり、前所有者坂元清行から武村居住の嫡子寅太郎へと移っている。誕生地碑が明治22年3月20日に建てられ、同45年6月21日鹿児島市が旧敷地を購入し公園化された。

西郷は安政元年（1854）正月21日、藩主島津斉彬の江戸参勤に従って初めて鹿児島を発ち3月6日江戸着、4月には庭方役に任用される。留守中の家は次弟吉二郎（明治元年戦傷没）を中心に家計を切盛りするが、それでも困窮し、西郷28歳の同2年12月12日、誕生地259坪半を大番頭座進達掛鎌田源次郎へ永代売り願を出し売却、家族は上之園の借家に移った。この時西郷は江戸勤務で、活動資金が必要なため家屋を売却したともいわれる。薩摩に帰藩したのは同4年5月24日で、3年4ヶ月ぶりの家族との生活であった。借家は現在の中央町13番1号附近にあたり、地積6畝15歩（195坪）、地番

は上之園町51番・52番に相当する。天保13年当時はこの地に有馬清之丞が住んでおり、有馬は安政6年（1859）に上之園町21番街区、地番高麗町180番の高麗本通り沿いにみえるので前居住者であろう。

西郷宅地跡碑が共研公園ナポリ通り側入り口に設置されているが、実際は約60m鹿児島中央駅側になる。現在は民間の建物が建ち、碑建立時は民有地より市有公園に設置しやすかったのであろう。鹿児島に限らず諸事情による碑の位置の移動は散見される。

明治2年6月、西郷は太政官から賞典禄2000石を下賜され、同年7月8日に武村の寿国寺近所に屋敷690坪を三崎平太左衛門久懿から譲り受け、約14年間の上之園借家住まいの後移り住んだ。この地は安政6年城下絵図（図1）では二階堂部（しとみ）中屋敷とみえる。城下絵図の方位・縮尺の精度は低いが、図の左側が現在の九州新幹線高架橋・西田町方面になる。部は当時、平之馬場現在の平之町8番・9番街区に本屋敷702坪、添地3筆計681坪を持ち、武屋敷は城下郊外の別荘的な屋敷であった。標高は13m程あり柴垣に囲まれ、高い建物のない当時は武村の田んぼ越しに城下の街並み・桜島を眺望できた。この地は江戸期から明治22年までは鹿児島郡近在の武村であった。同年に西別府村・武村・田上村3村を合併し西武田村となり、昭和9年鹿児島市に合併した。

現在は西郷公園になっており、住居表示は武2丁目28番。上之園借家から直線距離で西方向へ約800mの地にある。二階堂部中屋敷は安政6年から明治2年の10年の間に三崎へ移ったことになる。部は戊辰戦争で番兵4番隊差引として明治元年8月から同2

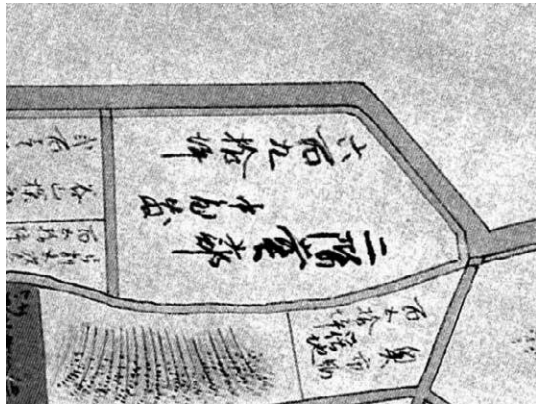


図1 安政6年城下絵図

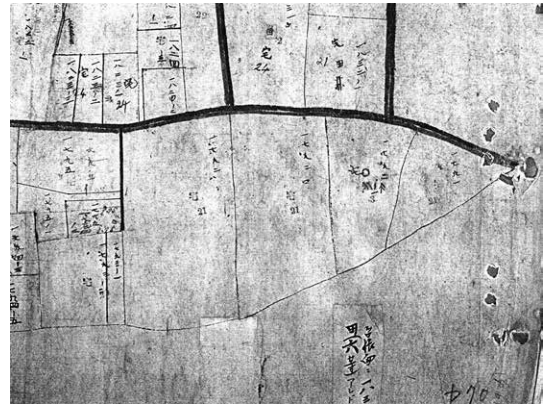


図2 旧土地台帳附属地図

年正月に秋田・庄内に出軍しているの
で(「薩藩出軍戦状」)この頃三崎へ土地屋敷
を売却したのではないか。蒔は明治10年10
月には赤坂皇居内の宮内省、さらに内務
省・農商務省官員として勤務し(「改正官員
録」)退官後も東京に居住しており、墓は東
京青山霊園にある。

西郷は「明治6年の政変」までは家を空け
ることが多く、屋敷に帰って来たのは6年
11月10日である。農作業や狩猟・温泉への
小旅行、また川口雪篷を同居させて青少年
の教育に当たっていた。同10年2月15日薩
軍が挙兵東征するや、西郷は同17日鹿児島
を発ち、この日まで暮らした屋敷である。
戦争がおこると家族は西へ4km程の西別
府の野屋敷(拘地)に3月から城山陥落まで
前後1年半程も蟄居していた。6月24日西郷
屋敷附近から武岡に向け薩軍対政府軍の激
戦が展開され屋敷は焼失してしまった。こ
の時野屋敷には妻いと35歳、戦争で負傷し
帰郷していた菊次郎17歳と、川口雪篷を含
む12名の大家族であった。戦争終結後の明
治13年、東京在勤の弟従道が屋敷を原型に
復した。後この地は郡村宅地として地番、
武町1791番から1793番へ分筆され(図2)、
川口雪篷・西郷隆準・寅太郎所有から午次
郎・隆一・隆興・吉之助へと所有者は変遷
し(「旧土地台帳」)、その屋敷も人手に渡っ
て昭和52年に取り壊された。その後鹿児島

市が屋敷を買い戻し同55年公園として現在
に至っており、当時の井戸が残っている。
平成3年11月には西郷と庄内藩家老管臥牛
の対話像の序幕式典が行われた。現在、加
治屋町誕生地は約1140㎡(345坪)、武町屋
敷跡は約2300㎡(700坪)の広さである。幕
末維新当時と広さが異なるのは、当時の測
量技術の精度、市の土地購入範囲や道路拡
幅・区画整理で増減したことによる。

吉田初三郎が描く大口町鳥瞰図 「鹿児島県の近現代」教育研究センター 客員研究員 吉満 庄司

はじめに

以前、鹿児島県歴史資料センター黎明館で学芸専門員（近現代担当）をしていたとき、「大正の広重」と呼ばれた吉田初三郎が描いた鹿児島市や鹿児島県の鳥瞰図に関心を持ち、鹿児島県高等学校歴史部会発行の『鹿児島史学』第51号（平成18年）に「吉田初三郎の『鹿児島市鳥瞰図』」という論文を寄稿したことがある。その中で、初三郎が描いた鹿児島県関係の作品について、当時確認できたものを紹介した。具体的には、「鹿児島県鳥瞰図」（昭和6年）、「鹿児島神宮絵図」（昭和6年）、「鹿児島市鳥瞰図」（昭和10年）、「林田温泉鳥瞰図」（昭和12年）、「串木野市鳥瞰図」（昭和28年）の5点である。

筆者は令和4年から鹿児島県立大口高校に勤務しており、現在は校長という立場ゆえ生徒の前で授業を行うことはできないが、「総合的な探究の時間」などをとおして生徒と一緒に細々と郷土の歴史を研究している。そうした中、昭和11年に吉田初三郎が描いた「大口町鳥瞰図」が存在することが判明した。伊佐市は平成20年にいわゆる「平成の大合併」で大口市と菱刈町が合併して誕生してできた市だが、昭和29年に山野町、羽月村、西太良村と合併して大口市となる前までが大口町ということになる。

ところで、大口高校では生徒と保護者、そして市民の方と一緒に郷土の歴史を学ぶ「ふるさと歴史講座」という市民講座を開催している。これまで考古学からみた伊佐の歴史や戦国武将の新納忠元をテーマに取り上げてきたが、今回は「山野線と伊佐の繁栄」をテーマに設定した。「総合的な探究の時間」で旧国鉄山野線の歴史を研究した生徒がおり、予想以上に高レベルの成果をあげたため、彼らも講師に抜擢して研究成果を地域の方々に還元させようと企画した次第である。

筆者は、「吉田初三郎が描いた大口町鳥瞰図を読む」というテーマで講座を担当し、鳥瞰図に描かれている昭和初期の大口の繁栄の様子について読み解いていった。小稿は講座で話をした内容を基に、その後の研究で知り得た知見等を加えてまとめたものである。

吉田初三郎と「初三郎式鳥瞰図」

吉田初三郎は明治17年京都に生まれ、尋常小学校卒業とともに友禅図案絵師に丁稚奉公し、次いで京都三越の友禅図案部に職工として勤務した。この経験が、後の「初三郎式鳥瞰図」に用いられるほかしやグラデーションなどの技法や、ページユや薄紫といった独自の色彩感覚を与えたともいわれる。

生徒vs校長vs研究者vs歴史作家
大口高校
ふるさと歴史講座

大口は古くから薩摩・日向を結ぶ交通の要地で、近代に入ると鉄道と共に発展した街です。今年版、「総合的な探究の時間」で、「国鉄山野線」を研究テーマにした生徒さんいました。そのことを受けて関係者から貴重な資料や情報を提供していただき、研究は更に充実しました。そこで、研究の成果を伊佐の皆さまに還元させるため、企画「ふるさと歴史講座」第3弾として、「山野線と伊佐の繁栄」をテーマに開催することとしました。共催（後者をいいた）は鹿児島県庁、県内から取りつけてくださる研究の場にもからご講演し上げます。

- 日 程：令和6年11月6日（水）～11月20日（水）10:00～20:00（6日目のみ14:00～16:00）
- 会 場：大口高校会議室（6日目のみ伊佐市文化会館大ホール）
- 受講料・無料。ただし、資料代として3,000円（6回分）が必要（第1回目の講座の受付で徴収します）

第1回 11月6日（水）	第2回 11月12日（火）
講師 史野 龍雄 大口高校3年 生徒会長 講師 山下 清正 大口高校3年 総務部長 講師 吉満 庄司 鹿児島大学 経済学部教授 講師 吉満 庄司 大口高校 校長	講師 吉満 庄司 大口高校 校長 講師 吉満 庄司 大口高校 校長
第3回 11月15日（金）	第4回 11月20日（水）
講師 小森 龍仁 鹿児島大学 法文学部 准教授 講師 小倉 聖二 伊佐市管理地 地域連携係長 講師 東川 龍太郎 かごしま建設 の会代表理事	講師 吉満 庄司 大口高校 校長 講師 吉満 庄司 大口高校 校長
第5回 11月28日（水）	第6回 11月30日（金）
講師 吉満 庄司 大口高校 校長 講師 吉満 庄司 大口高校 校長	講師 吉満 庄司 大口高校 校長 講師 吉満 庄司 大口高校 校長

○ 主 催：大口高校、大口高校PTA、大口高校同窓会
 ○ 共 催：伊佐市、伊佐市教育委員会
 ○ 後 援：鹿児島大学法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センター、南九州博士研究会、伊佐市文芸研究会、大口城を愛する会
 ○ 問合せ先：大口高校 ☎0995-22-1441 〒895-2511 伊佐市大口町2670
 ○ 申込み：下の申込み用紙を記入して取り送り、前夜宛先に持参（9:00～16:45）するか、もしくは郵送してください。受付開始は10月18日（金）19:00からです。（電話での受付はできません。）
 ○ 定 員：先着50人。超えた場合はキャンセル待ちも受け付けます。

※審査番号は、学校名や所属など必要に応じて記入ください。

お名前	〒	備考
お住所	ご住所	電話番号

※「ふるさと歴史講座」の申込みに当たって取得した個人情報、講座の運営以外の目的には使用しません。

日露戦争に従軍した後、23歳で単身上京、東京白馬会に入会し、浅草で絵看板などを描いて収入を得る生活を送る。2年後、京都に帰り、関西美術院で絵画を学ぶ。ここで院長の鹿子木孟郎から「洋画界のためにポスターや壁画や広報図案を描く大衆画家となれ」と勧められ、京都大丸の児童室壁画や大阪拓殖博覧会の天井画などを手がける。翌年、京阪電鉄の依頼で「京阪電車案内」を描くが、これが学習院普通科の修学旅行中の皇太子（昭和天皇）の目にとまり、「これは奇麗で解り易い。東京へ持ち帰って学友に頒ちたい。」と絶賛したことから、初三郎の名前が世に知られるようになった。



吉田初三郎

師の勧めと皇太子の称賛、2つの出来事をきっかけに、以後各所沿線などをパノラマ風の手法で描く商業画家としての創作活動に入ることとなった。大正4年、京都御所

で執り行われた天皇即位式に当たって描いた「京都全市鳥瞰図」をはじめ、政府の命で鉄道省の記念事業として刊行する『鉄道旅行案内』の装丁と挿絵すべてを担当することになり、日本全国を取材旅行し1年半で40数版を世に出した。この事業を通して、全国の都市や鉄道、ホテル等から鳥瞰図の作成依頼が次々と舞い込むようになった。

初三郎は昭和30年に71歳で亡くなるが、彼が描いた鳥瞰図は、確認されているだけで約1,600点とも3,000点以上ともいわれる。彼がこれほど多くの作品を制作できた理由は、作品制作を支えるシステムにあった。各地の観光協会などから注文を受けると、初三郎自ら現地に赴き数種類の風景スケッチを描く。そのスケッチを基本資料として、測量地図、航空写真、その他の関連資料などを総合して原画の構想を決定する。その原画を基に助手（弟子）たちとともに下図を作り、着色されたパノラマ地図の原画を作成する。原画は印刷所に回され、石版印刷（後にオフセット印刷を購入）されて、折り本などの製品にされる。完成した案内図は、大正7年に設立された初三郎の作品を出版する「大正名所図絵社」（後に観光社と改名）を通じて依頼主に納品される、といったシステムが完成していた。

「初三郎式鳥瞰図」の特徴は、横長の画面で中央部を細かく描写する一方で、左右の端をU字型に曲げて、実際には見えない円形まで入れ込んでパノラマ風に描くことである。「大口町鳥瞰図」でいうと、現在市営球場がある鳥巢の上空あたりに視点を持ってきて、画面右側には鹿児島市や桜島、左側には水俣を経て門司までを描き、さらに奥の方には東京や富士山まで描かれている。横長という枠で構図を考えたことで、結果的に大胆なデフォルメが生まれたと考えられる。

もう一つの特徴が、各所図や都市図の中に鉄道路線図と道路図を組み合わせたことである。スポンサーが鉄道会社でなく地方自治体であっても、都市や観光名所を描くだけでなく「交通と名所との関係が分かりやすい図」でありたいという思いがあったのであろう。こうして、初三郎の鳥瞰図は大正から昭和初期の鉄道旅行の発達に伴う観光ブームの中で人々の人気を博していったのである。「大口町鳥瞰図」の場合は、薩摩大口駅の駅舎を中心部に大きく描き、そこから左右に山野線の路線が延びている。そして、今まさに5両の客車を引いた蒸気機関車が薩摩大口駅に到着しようとする状況が描かれている。

絵画としての評価については、当時より「美術的ではない」とか「客観的な地図ではない」という批判の声があったが、それは日本では商業美術に対する評価がきちんと確立されていなかったためである。初三郎の死後、長らく忘れられていたが、平成11年に大阪府の堺市博物館で大規模な特別展「パノラマ地図を旅する—『大正の広重』吉田初三郎の世界—」が開かれたのを契機として各地の博物館や美術館で展覧会が開かれるようになった。現在では研究も深まり、「初三郎式鳥瞰図」に正当な評価が与えられてきている。

発行当時は実用品だったものが、現在では芸術作品や史料として蒐集・展示の対象となっており、八戸クリニック街かどミュージアムは約2000点、京都府立京都学・歴彩館は約270点を所蔵している。今回紹介する「大口町鳥瞰図」も八戸クリニック街かどミュージアム所蔵の作品である。

なお、「初三郎式鳥瞰図」は、歴史資料という観点からも戦前の写真が少ない時代における都市や観光地に関する画像資料として、極めて貴重な資料と位置付けられる。航空写真が普及する以前においては、写真も含めて鳥瞰図が都市を描いた唯一のものであった地域も多い。今回紹介する「大口町鳥瞰図」も極めて多くの情報を我々に与えてくれ、下部に記された文字情報と併せて読み解くとき、戦前の大口の繁栄ぶりが鮮やかに甦ってくるのである。

「大口町鳥瞰図」から読み解く戦前の大口

「大口町鳥瞰図」は、縦14cm ×横50cm、表面はカラー刷で裏面は1色刷で印刷折本である。中心に当たる部分に薩摩大口駅が描かれておりそこから左右に山野線が延びている。鳥瞰図が描かれた昭和11年当時、山野東線（栗野～山野）は既に営業していたが、大口～水俣の開通は翌12年である。また、右端の川内川の手前から川内に至る宮之城線も描かれているが、宮之城線の開通もまた昭和12年のことである。開通はまだであっても線路の施設工事は着々と進んでいるので、翌年の開通を見越して描かれたと考えられる。

薩摩大口駅の駅舎は木造平屋だが、他の建物に比べて群を抜いて大きい。線路に沿って菱刈方面に行ったところに2階建ての町役場が描かれている。ここは現在大口郵便局があ



「大口町鳥瞰図」（八戸クリニック街かどミュージアム所蔵）

る場所で、昭和29年の大口市発足後もそのままこの庁舎が使用されており、現在の市役所の位置に新庁舎が完成したのは昭和31年のことであった。駅前を中心部には、警察署や郵便局といった公共機関など2階建ての建物もいくつか確認できる。

薩摩大口駅の北東には大口中学校の校舎が見える。大正11年に創設された旧制大口中学校で、現在の大口高等学校の前身である。現存する記念図書館は昭和7年の建立なので、位置的に南西の角の独立した建物がそうなのかもしれない。もう一つの前身である高等女学校は市街地の北の外れ、現在の始良・伊佐地域振興局伊佐庁舎の建つ場所に描かれている。この両校が昭和23年に戦後の学制改革により合併して大口高等学校となり、102年の歳月を経て現在に至っている。画面の右端には、現在の伊佐農林高等学校の前身である伊佐農林学校が描かれている。

大口中学校から一つ山を越えた現在の大口中央中学校が建つ場所には青年学校が確認できる。昭和10年の青年学校令により、従来の実業補習学校・青年訓練所・中等公民学校が統合されて青年学校となったものである。なお、その後戦局の悪化に伴い昭和14年からは義務教育となり、軍国主義の養成・軍事教練が強化されていく。小学校については大口小学校、大口東小学校、そして牛尾小学校の3校が確認できる。

画面の下部を流れる羽月川を挟んだ西側には、競馬場が描かれている。大口では江戸時代から馬の生産が行われており、天保年間には大口郷の組頭であった有村隼治が藩から300両を借り受け188頭の馬を購入し、農家に分配飼育させて馬の生産を促進したという記録がある。明治16年に編纂された『鹿児島県地誌』によると、当時の大口地方の馬の飼育頭数は2,401頭で、中でも原田村の830頭と白木村の699頭が群を抜いて多い。明治30年に県の指導で畜産振興を図るために産馬組合が組織され（明治36年に伊佐郡産馬組合と改称）、現在の伊佐農林高等学校の敷地に当たる場所に「大口定期駒市場」が開設され、毎年11月に仔馬のせり市が開かれた。そうした状況の中で、大正2年に西水流競馬場が新設され、毎年競馬会が開かれることになった。なお、この競馬場の跡地には、昭和43年に伊佐市陸上競技場が建設され、昭和52年には野球場や総合体育館などを併せ持つ総合グラウンドとして完成した。

「大口町鳥瞰図」で特筆すべきは金山である。牛尾小学校を越えた高熊山の向こうに、大口の中心地にもないような高層の建物が描かれている。大口の金山は歴史が古く、『薩藩政要録』には、享保年間には牛尾の金山の所在が明らかになっており、試掘が行われていたことが記されている。明治の後半になると日清・日露戦争の勃発を背景に全国的な鉱山熱が盛んになり、鹿児島県下でも続々と開鉱や試掘が行われた。大口地方では、明治27年に牛尾鉱山と布計鉱山、明治29年に大口鉱山、そして明治34年には山野鉱山で金・銀の採掘が始まった。牛尾鉱山では火力発電所を建設し青化精錬法という本格的な精錬法を導入するなどして産金額も大幅に伸びて、まさに“金山ブーム”が起こった。『明治100年』によると、金山で働く者は2,000人を超え、牛尾地区は一躍繁華街となり、当時大口の町には料理屋は1軒しかなかったが、牛尾には8軒もあったという。

この金山ブームはその後下火になっていたが、昭和6年の満州事変を契機に再び活況を呈することとなった。昭和8年に鯛生金山株式会社が布計鉱山を経営、翌9年には牛尾・大口両鉱山も買収して、近代的施設を設けて事業を再開した。昭和12年には1日の処理能力250トンの青化精錬所が建設され、翌13年には送電能力をアップするために山野駅前に日

水山野変電所が建設された。「大口町鳥瞰図」が描かれたのは、まさにこのような活況をみせている時期であった。

「薩摩大口案内」にみる戦前の大口

鳥瞰図の下部には「日本一米の名産地 薩摩大口案内」という大口町の地理や歴史、そして特産品などが記載されている。言わば「観光ガイドブック」のような存在である。その中から注目すべき記述やデータをいくつか紹介したい。

まず、「1 沿革と地理」では、「戸数2,636戸、人口13,110人を擁し、全国的著名な伊佐米の原産地である。東西2里半、南北2里、面積4.5方里を有し、鉄道は栗野、川内、水俣への三叉路に当たり、県道は熊本県人吉、水俣両町並びに宮崎県京町及び県下出水、宮之城、横川、栗野の各地へ四通八達の地の利を占め、町立青年学校と3小学校の外、県立中学校女学校及び日本一の折紙を付けられた伊佐農林学校の3中等学校を有する教育町であると共に、北薩における農産物その他の集散地である。」とあり、交通の要衝であることと教育に力を入れていることが特徴とされている。県立中学校（大口中学校）と女学校（大口高等女学校）は戦後に合併して大口高等学校になったが、昭和36年には私立の大口明光学園高等学校が設置され、現在も市内に3つの高等学校が存在している。伊佐市は「教育日本一」をスローガンに掲げており、限られた財政状況の中でも教育に力を注いでいるが、人づくりが大切という考えはこの頃から脈々と引き継がれてきたものと思われる。

「2 土地と戸口と産物」では、以下のような一覧表が挙げられている。

土地面積		産物収穫高		(産業別人口・戸数)					
田	1,020町4	米	52,300俵	農業	6,667	1,163	交通業	367	86
畑	450町2	麦	12,800俵	鉱業	246	59	公務・自由業	733	172
原野	619町7	木炭	54,888俵	工業	847	163	その他	1,104	302
山林	220町1	繭	19,009貫	商業	3,146	691	計	13,110	2,636
宅地	363,780坪								

昭和11年現在

「3 名所と旧跡」で詳細に紹介されているのは、八幡神社、忠元神社、関白陣、頼山陽遺跡等である。八幡神社（郡山八幡神社）は、建久5年に菱刈重妙の勧請により建立されたという由来から記され、本殿が国宝指定へ向けて申請中であるとしている。しかし、この時点ではまだ最古の「焼酎」の文字の記された木片は発見されておらず（発見は昭和29年の改修時）、焼酎神社等の文言は見えない。

忠元神社については、新納忠元の功績や人物の紹介に始まり、彼の定めた「二才咄格式定目」が郷中教育（健児の舎）の基本となり、イギリスのボーイスカウトに影響を与えたことなどを紹介している。関白陣については、新納忠元が豊臣秀吉に対しても全くひるむことなく堂々と渡り合ったことを紹介し、東郷平八郎の筆による記念碑が建立されていることが記されている。

頼山陽遺跡とは、文政元（1818）年に頼山陽が鹿児島を訪れた帰路、大口から水俣に向かう国境の亀嶺峠でその雄大な景色を詠んだ詩「過亀嶺臨眺諸岳」を刻んだ歌碑（昭和3年建立）のことである。ここは肥後・薩摩・日向・大隅の四つの国の境界にあたるところで、後ろに見える桜島が名残惜しく別れがたく、前面には阿蘇山が笑顔で迎えてくれるかのようであり、東に霧島山、西に雲仙岳を臨むと詠んでおり、大口の置かれた地理的特徴を見事に表している。

「4 大口おみやげ」には、以下の特産品があげられている。米の焼酎、竹細工各種、甘柿、椎茸、かるかん、更生の素、鯉味噌、生鯉の8つである。鹿児島で焼酎というとさつまいもで造る芋焼酎というイメージがあり、米の焼酎は意外に思うかもしれない。大口は「伊佐米」で知られる米どころでもあり、戦後まで米の焼酎も盛んに作られていたという。昭和45年に大口及び菱刈の11の酒造会社が合併して大口酒造ができたが、それ以前は主に米焼酎を造っていたという酒造会社もあったという。山を一つ隔てた熊本県人吉市では今でも焼酎といえば米焼酎である。なお、日本で最も古い「焼酎」という文字が記された郡山八幡神社の木片は永禄2（1559）年で、さつまいもが鹿児島に入ってくる前なので、当時の焼酎は芋焼酎ではない。粟とかの雑穀で造られていたとも考えられるが、米が豊富であった大口であれば、当時から米で造っていたと考えたい。

更生の素とは、昭和初期に豚の価格が暴落し困窮する生産者を救済（更生）しようと昭和7年に当時の伊佐農林学校長の発案で作られた豚味噌である。発売からわずか数年で大口を代表する特産品（お土産）となっており、県下の各農業高校で生産・販売されている豚味噌の元祖ということになる。現在も伊佐農林高等学校の生徒らが昔ながらの味を守りつつ生産に当たっており、同校の人気商品となっている。

終わりに

小稿では「大口町鳥瞰図」を描いた吉田初三郎を紹介し、鳥瞰図から戦前の大口の町の繁栄ぶりについて読み解いた。

最後に、今回の調査を通して確認できた鹿児島関係の鳥瞰図の一覧を掲載するが、その他に原本が確認できないものや作者が吉田初三郎であることが確認できないものなどもあり、今後さらなる調査・研究が必要と思われる。

最後になりましたが、生徒の探究活動や歴史講座に当たり「大口町鳥瞰図」のデータ提供など便宜を図っていただきました青森県八戸市の「八戸クリニック街かどミュージアム」並びに同館の小倉学館長兼学芸員様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

吉田初三郎筆鳥瞰図（鹿児島県関係分）一覧

	作品名	発行所	発行年	備考
1	「鹿児島県鳥瞰図」	鹿児島県	昭和6年	
2	「鹿児島神宮図絵」	鹿児島神宮社務所	昭和6年	
3	「鹿児島市鳥瞰図」	鹿児島観光協会	昭和10年	
4	「南九州第一の料亭ひらの」	料亭ひらの	昭和10年	絵葉書
5	「川内市鳥瞰図」	川内町商工会	昭和10年	絵葉書もあり
6	「大口町鳥瞰図」	大口町役場	昭和11年	
7	「大口町鳥瞰図」	大口町役場	昭和12年	絵葉書
8	「林田温泉鳥瞰図」	林田乗合自動車	昭和12年	
9	「四神宮巡拝鳥瞰図」	霧島神宮四社巡拝事務所	昭和13年	
10	「鹿児島市鳥瞰図」	鹿児島市	昭和25年	
11	「串木野市鳥瞰図」	串木野市役所	昭和28年	

寄贈資料

大垣市市立図書館『郷土資料目録』第8集、大垣市市役所（2024年8月9日、大垣市立図書館様より）

鹿児島県知名町『奄美群島日本復帰70周年記念 沖永良部 聞き書き選集 知名町の戦後史(1)』知名町役場 企画振興課（2024年9月2日、三上大輔様より）

同上『田皆字誌 沖永良部島唯一・一字一校区田皆字 トラバーチンとカルスト地形の田皆』田皆字誌編纂委員会、（2024年9月2日、根釜昭一郎様より）

同上『知名町 奄美群島日本復帰五十周年記念誌』知名町「奄美群島日本復帰50周年記念事業」実行委員会、（2024年9月3日、前利潔様より）

茂野洋一『奄美現存古語注解』島影社、（2024年12月19日、茂野洋一様より）

平田静也『貴駕島』当原会、（2025年1月15日、平田静也様より）

佐賀大学地域学歴史文化研究センター『小城の士族と佐賀事変 史料集』（2025年1月20日、佐賀大学地域学歴史文化研究センター様より）

佐賀大学地域学歴史文化研究センター『江戸時代の災害と小城 史料集』（2025年1月20日、佐賀大学地域学歴史文化研究センター様より）

佐賀大学地域学歴史文化研究センター『江戸時代の災害と小城』（2025年1月20日、佐賀大学地域学歴史文化研究センター様より）

今後の予定

来る3月22日（土）に、令和7年春のシンポジウム「〈#昭和100年〉で考える「鹿児島の近現代」—食文化・鉄道・遊びにみる“つながり”の歴史と未来—」の開催を予定しております。

近現代センター通信 第5号

2025年3月1日

発行 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

〒890-0065

鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21-30

電話 099-285-7532

メール kingendaijim@leh.kagoshima-u.ac.jp

<https://kadai-kingendai.jp/>

1

B O O K
ブックレット
L E T

大屋典一と一色次郎



鈴木優作
日高優介

「鹿児島近現代」ブックレット

2

B O O K
ブックレット
L E T

戦争体験から
紡ぎ出す
鹿屋と昭和の戦争



中嶋晋平

「鹿児島近現代」ブックレット

令和7年 春のシンポジウム

〈#昭和100年〉で考える 「鹿児島県の近現代」

— 食文化・鉄道・遊びにみる“つながり”の歴史と未来 —

入場料
どなたでも
無料

日時 2025年
3月22日(土)
13:00▶17:30
(12:30開場)

会場 鹿児島大学郡元キャンパス
学習交流プラザ2F学習交流ホール
鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21-30
同時配信あり

テーマ1「食文化」

- 報告: 正岡佑月(鹿児島大学法文学部4年生)
- 講演: 千葉しのぶ(NPO法人霧島食育研究会理事長、千葉しのぶ鹿児島食文化スタジオ代表)

「『鹿児島 100年の食』～伝えていきたい食と心～」



千葉しのぶ

テーマ2「鉄道」

- 報告: 山本尚昌(鹿児島大学法文学部2年生)・鹿児島大学乗り物研究会
鹿児島県立大島高等学校
- 講演: 杣木郁朗(宮崎市史編さん事業近現代史部会長、宮崎歴史資料ネットワーク副代表)

「南九州の鉄道敷設の歴史とこれから」



杣木郁朗

テーマ3「遊び」

- 報告: 鹿児島県立錦江湾高等学校
- 講演: 伴野文亮(鹿児島大学法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センター特任准教授)

「カードゲームにみる“つながり”の歴史と未来
— 百人一首からポケカ、そしてその先は? —



伴野文亮

総合討論

「いま、〈#昭和100年〉から何を学ぶか」

同一会場にてポスター発表形式による県内高校生の
「総合的な学習(探究)の時間」における成果発表会を同時開催します。

申し込み

応募締切: 2025年3月21日(金)

※右QRコードから専用フォームに必要事項を記入し、お申し込みください。
※お電話での申し込みも受け付けております。
※定員に達し次第応募を締め切らせていただきます。(定員: 100名)



問い合わせ先



鹿児島大学法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センター

✉ kingendaijim@leh.kagoshima-u.ac.jp ☎ 099-285-7532 (担当 江・佐藤)